

臣下の大戦



足立邦夫

Kunio Adachi

新潮社

臣下の大戦



足立邦夫

新潮社

しん か たいせん
臣下の大戦



1995年8月30日発行

【著 者】 足立邦夫

【発行者】 佐藤亮一

【発行所】 株式会社新潮社

郵便番号162 東京都新宿区矢来町71 振替00140-5-808

【電話】 編集部(03) 3266-5411 読者係(03) 3266-5111

【印 刷】 二光印刷株式会社

【製 本】 大口製本印刷株式会社

価格はカバーに表示してあります。

© Kunio Adachi 1995, Printed in Japan

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り下さい。

送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-407001-7 C0095

臣下の大戦*目次

プロローグ 7

第一章 秋陽の下の三色旗^{トリコロール} 10

第二章 ビョルケの密約 42

第三章 二重の河 80

第四章 国家の理想 113

第五章 アリエ河の夏の光 156

第六章 危険な同盟 208

第七章 仏印を南部へ 249

第八章 二都の嵐 277

第九章 一九四四年七月二十日 330

第十章 雪の聖夜 ハイリゲ・ナハト 384

第十一章 ゲームの終わり 418

第十二章 罪万死に値す 457

エピローグ 479

あとがき 482

取材協力者一覧 484

主要参考文献 485

装幀
*
新潮社装幀室

臣下の大戦

本書に引用の資料については、かぎ括弧^{かっこ}でくくり、二字下げとし、漢字やかな遣いなども原文通りとした。ただし、引用文中の振りがな多くの筆者がつけたものであり、二重括弧は原文では一重括弧となっている。

プロローグ

私はその写真を見たのは随分昔のことのような気がする。

明らかに素人が撮ったものと断定できるほどピントが甘く、ぼやけたモノクロ写真だった。

その様子が私の記憶の中にしまい込まれた映像にまで古ぼけたセピア色を被せてしまったのだろうか。

その写真を見たのは、ドイツのボンの芸術ホールで開かれたある歴史展示展でだった。

当時、私は日本の一新聞社の支局長としてボンに滞在していた。

地元紙に載ったその展示会の紹介記事の中に「個人や図書館、記録保管所、博物館など公的な所蔵から借り出した展示品」というのがあった。

私の関心も所詮は外国の歴史に寄せる傍観者の域を出るものではなかった。

それでも歴史に関心のある私は時間の都合をつけて、何とはなしに足を運んだ。

それだけに展示品の中に東洋人の顔を見出したのは予想外のことだった。

いまでも思い出すが、確か会場の入り口から入って左側のコーナーだった。そこにルビーをはめこんだ指輪や十八金のネックレスでも陳列してありそうな、宝石店で見かけるガラスケースのようなものがあつた。ケースの内部は宝石店のまばゆい照明とはおよそ比べものにならないほど照度の低い光が展示品に落ちていた。

私が特別な期待もなしに覗くと東洋人たちの顔があつたのだ。

正確にいえば「東洋人たちの写った写真」である。

写真は数枚あつた。

その中に、サンタクロースの姿をした人物の左右と前

後に東洋人が四、五人、西洋人の女性が二人ほど写ったものがあつた。

写真の中では、一人の東洋人は、「kotak」という欧字が書かれ、顔の大きさは優にあるロールフィルムの箱状のものを両手で持ち上げ、カメラの方に見せている。その前の東洋人は人形らしいものを左手にして椅子に座っている。左端の眼鏡をかけた東洋人も何かを左手に持っている。サンタクロース姿の人物の肩の向こうにも瘦せて小柄な、学生を思わせるもう一人の東洋人の姿が見える。西洋人の女性はサンタクロースを間にして左右の位置に一人ずついる。一人は上背がある。他は顔が見えるだけ。最後の、つまり八番目の人物は白い髭だけをつけ、左手はプレゼントでも入っている、あるいは入っていたと思わせる袋を握っている。顔は東洋人系のももあり、髪は金髪で西洋人系のももある。どちらとも判別はつけ難かった。

写真に添えられたドイツ語の説明は「聖ニコラウス祭」と読める。

聖ニコラウス祭は、紀元四世紀ごろ、小アジアに実在した聖者ニコラウスを祝う祭りである。聖ニコラウスは日本人には「サンタクロース」の名前で知られている聖者と同一人である。サンタクロースは十二月二十四日の夜にプレゼントを届けるが、ドイツでの聖ニコラウスは

二十日近くも早い十二月六日の夜に訪れる。三角型のような帽子を被り、僧正の様子をしており、赤い頭巾に長靴ばきのサンタクロースとは余程違う。しかも聖ニコラウスは子供たちの一年間の行いを記した「闇魔帳」^{闇魔帳}を手にしており、その子供たちの面前で読み上げる。「ループレヒト」という従者が、良い子には袋から取り出したプレゼントを渡すが、悪い子は箒の先のように小枝を束ねたむちでたたく。子供たちはプレゼントへの期待と怖さの混じり合う気持ちで二人を迎える。

私がまだ二十代で、南ドイツの寄宿方式の語学校でドイツ語を勉強していたとき、校長先生夫婦がこの役回りでプレゼントを持って生徒たちの間を回っていたことを思い出す。

私が見下ろしているこの写真も私の昔日の思い出と同じように古びている。いや、私の思い出よりもっと古びたものだろう。

写真では、中央の人物が聖ニコラウスの役回りなのだろう。そして、東洋人か西洋人かの見分けがつかない人物は右手に箒のようなものを持っており、これは明らかにループレヒト役だ。

そのモノクロ写真の周囲に並んでいるガラスケースの中の幾枚かの写真も、いずれもモノクロで、田舎風のホテル、バスポート写真を思わせる正面から撮った五十歳

代の人物、記念撮影なのだろうか、そのホテルの前に並んだ日本人グループなどが写っている。

それに万年筆で堂々と縦書きされた日本語の名前とフランス語の短い文章を記した紙片も数枚ある。

写真に添えられた断片的な説明を繋ぎ合わせると、フランスのヴィシーに駐在していた日本の外交官一行が、ドイツ軍やヴィシー政権の要人たちとともに連合軍の反攻を受けながら南ドイツのジグマリンゲンの街に逃れ、ドイツの無条件降伏直前まで滞在していたという。

ヴィシー政権はナチス・ドイツ軍のフランス侵攻により中部の温泉保養の街ヴィシーに、第一次大戦の英雄アンリ・フィリップ・ペタン元帥を元首にして樹立された親独政権であったという程度の知識は私にもあった。やがてフランス国内に興った抵抗運動と連合軍の崩壊、元帥ペタンは裁判にかけられたはずである。枢軸側の日本は当然ヴィシー政府に大使を派遣していただろう。

ドイツ軍の敗走により、ペタン元帥らヴィシー政権の閣僚たちと日本の大使や外交官たちは、どう動いたのだろうか。

私は古ぼけた数枚の写真に視線をあてどなく移し続けた。

「ジグマリンゲン」という地名はそれ以来私の頭の中に一定の場所を占めてしまった。地図帳を本棚から引っ張

り出して地名の場所を探してみた。石油会社が出しているこの道路地図帳、いやこの分厚さからは「道路地図本」というべきだろう、それには大抵のドイツの街や村の所在が明記されており、自動車旅行には欠かせない羅針盤だった。地図を開いてみると、南ドイツ地方の一番の目印であるボーデン湖^ゲより北に向かって四十キロばかり入ったところのシュヴァーベン高原^プ地帯の南側にある。地名はその大きさに従って表示の文字が変えられているが、その街は「中クラスの下」程度というところか。

さらに手元にある資料としてドイツのホテル案内書のページを繰ってみた。これの便利なことは、格づけされたホテルの案内が載っていることは勿論のことだが、街についての簡単な案内が記述されていることである。ジグマリンゲンについても案内はあった。郵便番号や市外局番などが初めのほうに並んでいるが、それらを省くとおよそ次のようになる。

「バーデン・ヴェルテンベルク州に属す。海拔七百メートル。住民一万五千二百人。見所は、聖ヨハン教会、ヘディンガー教会、城^{シロス}、マーシユタル博物館」

案内はこれだけである。

続いてホテルが三軒紹介されている。

第一章 秋陽の下の三色旗

トリコロール

(1)

一九四四年九月十日は日曜日だった。

その日の午後、ジグマリンゲンのレオポルト通り四二番地のホテル・ツォラーホーフの前に埃にまみれた二台の車が止まった。いずれも車の屋根にはトランクなどを縛りつけ、後部に牽引された補助車には幌を被せ、荷物を満載していた。後部座席に座っていた者はガソリンを入れた補助タンクを大事そうに足元に置いていた。

車から降りたのはフランスのヴィシーから二十一日間にわたり逃避行を続けてきた駐仏日本大使館の館員一行だった。米国製のビュイックからフランス人の運転手が降り、後部のドアを開けた。身を屈めながら外に出たのはソフト帽を被り、少し太った大使三谷隆信である。シ

トロエンから降りたのは長軀で筋肉質、そしてハンサムな外交官補北原秀雄、黒縁眼鏡をかけた電信書記生近藤賢一郎。いずれも疲労の色を顔や動作に漂わせていた。

一行が顔を向けた建物には「ZOLLER-HOF」とホテルの名前が大きく表示されていた。そして、壁の上方には、「Z」という文字を白く浮きあがらせた城のようなものの上を馬が跨ぎ、馬に乗った一人の男が左手にビールジョッキを掲げた奇妙な絵が円の中に描かれている。白い壁はホテルの清潔さを、そして窓辺の木箱に植えられた花々はここが平和であることを、それぞれ誇示しているようだった。

九月初めとはいえ、南ドイツの清澄な空気はひんやりとし、夏が既に過ぎ去ったことを告げていた。

車が到着する音はホテルの中にも響いた。ホテルの女主人アントーニエ・シュミット、長女パウラ、二女ヒル

デガルトが出てきた。日本人たちと面と向かい合うのは三人にとつて初めてのことだった。ホテルに日本人客が泊まったことは一度とてない。三谷は帽子を取り、禿げあがった額を見せながら、一行がヴィシーからやってきた日本大使館員たちであることを少し異国訛りのあるドイツ語で告げた。別に説明されなくとも三人には分かっていた。ほかの日本人たちもどことなくドイツ人たちの客たちとは違う雰囲気漂わせていた。引つ込み思案というべきか。長い旅の疲れからくるものではなさそうだった。日本人というのはこのような性格の国民なのだろうとパウラは独り合点していた。

シュミット夫人は一九四四年九月初め、街にあるホーエンツォレルン郡庁長官ヴィルヘルム・ドレーアーの下に呼び出された。

ホーエンツォレルン郡はシュツットガルトを主都とする南ヴェルテンベルク・ホーエンツォレルンに属し、ジグマリンゲン、ヘヒンゲン両行政区を統括していた。

ドレーアーは錠前屋出身で、ナチス親衛隊（SS）隊員だった。隊の階級からいえば、上から四番目に当たる少将の地位にあった。当然のことながらナチ党員だった。シュミット夫人が郡庁に出向いたのは朝の十時だった。昼を過ぎた一時になっても帰宅しなかった。母親を

待つ姉妹は心配になってきた。母親が英国のBBC放送やスイスの放送など、海外のラジオ放送をこっそり聞いていたことが発覚して逮捕されたのだろうか。敵国の海外放送を聴取することは、一九三九年九月一日付の「特別放送措置に関する規定」により、死刑を含む厳罰によって禁止されていた。

母親が漸く帰ってくると、姉妹たちに意外なことを伝えた。

「このホテルは接收され、フランスのヴィシーからこちらに移動してくるフランス政府の人たちを泊めることになった。ドレーアー長官からそう告げられた。ホテル・レーヴェンの主人も呼ばれていて、同じような通告を受けた」

母親によると、ドイツ政府によるツォラーホーフの建物とその付属備品一切の接收は九月七日に行われるという。

この通告は母親宛に届けられた同六日付の文書で正式確認された。文書は次のように通告していた。

「一九三九年九月一日付の帝国総動員法第五条並びに二五条に基づきホテル全体は特別宿泊目的を即時実行に移すために安全管理下に置かれ、接收される」

別紙には政府主席（首相）だったピエール・ラヴァル

夫婦以下のヴィシー政権要人たちがツォラーホーフに宿泊することが伝えられ、十五人の名前と一人部屋か、二人部屋かの種別が明記されていた。

接収を命じたのは、外相ヨアヒム・フォン・リッペン・トロップ下のベルリンのドイツ外務省情報部フランス課だった。

ツォラーホーフでは九月七日以降の一般宿泊客を断り、レストランも一行の到着に備えて空けていた。

しかし、郡庁からは九月七日、ラヴァルらは城に入り、ホテルには日本人とイタリア人一行が滞在する、という連絡が入ってきた。ラヴァルは執務室として多くの部屋を必要とし、このホテルでは小さ過ぎ、日本人らの滞在先に変更になったようだった。

シュミット夫人たちも、ラヴァルが夫人とともにジグマリンゲンでの宿泊先となった城に既に到着したことを知っていた。

元帥ベタンも城に入っていた。

ホテルの横を走るユングナウ通りを山の方に向かったところに建てられていた帝国勤労奉仕団用バラックに、ベタン元帥一行に従ってドイツ入りのヴィシー政府の民兵団の隊員たち約二百人が駐屯し、紺色の制服にベレー帽を斜めに被った隊員たちと車がホテルの周囲を慌ただしく動いていた。

日本人一行はホテル側の指示に従い、車をホテルの背後の駐車場に回した。そこには「ツォラー醸造所」と表示された建物があった。建物にはさきほど見かけたのと同じ奇妙な絵が円の中に描かれていた。ビール会社のマークのようだった。一行が車から荷物を降ろすと、各自トランクなどを下げ、ホテルの中に入った。

ホテルの中は壁の白さを裏切らないような清潔さだった。フランスではどこか緩んだようなところに温かみがあるが、逃避行での混乱と危険を振り返れば、清潔さが安心感を与えた。それに食堂らしい部屋の天井や梁に使われている太い木に浮き出た鮮やかな木目はいかにも山の奥に隠れ込んだようで、命だけは助かったという感を日本人たちに与えた。

一行は階段を伝って二階上がった。部屋割りには日本人たちの間で決められた。お互いに話し合ったあと、漸く決着した。三谷が取った部屋はレオポルト通りに面した西側の二人部屋である。アイロンの利いた白い敷布のかかるダブルベッド、簡易な洋服ダンス、椅子とテーブルだけの質素なものだったが、この小さなホテルでは「貴賓室」にあたるほどの広さがあった。三谷の部屋の隣はこれまで三谷の秘書役を務めてきた北原が一人部屋を取り、その続きに、近藤の一人部屋が続いた。

パウラは三谷が荷を解くのを手伝った。三谷はトランクから次々と本を取り出し、テープルの上に積みあげた。シャツなどよりも本のほうが大事なようだった。本はフランス語のものがほとんどだった。その中には辞書と思われる分厚いものもあった。パウラ自身もう三十一歳だったが、若いころは本も好きで、とりわけ歴史に興味を覚えていた。勉強する意欲もあったが、青春は家業の手伝いと戦争の中で消えてしまっていた。五十は過ぎたと思われるこの日本人がいまも学ぶことへの情熱を失っていないことが羨ましかった。

パウラは本の中に聖書のあるのに気づいた。パウラにはキリスト教を信じているこの日本人がひどく身近なものに感じられた。少なくともこの日本人は異教徒ではないのだ。パウラにとって初めて長期滞在する日本人たちのことで最も心配だったのは宗教のことだった。

「これが私の家族です」

三谷は大事そうに写真を見せた。異国的な顔立ちが並んでいた。異国にも家庭があり、ドイツと同じような家族の絆がある。パウラにとっても、軍隊に征っている弟アルベルトのことが気がかりだった。

パウラらは日本人たちに二階にあるトイレや風呂の場所を教えた。トイレ、風呂つきの部屋はなく、共同のトイレが二つ、風呂が一つあった。お湯は地下室から送ら

れてきていたが、ボイラーで燃やす石炭も配給制で量が制限されていた。三日に一度ぐらいしか風呂に入ることができなかった。

三谷は一人になると、レースのカーテンが掛かった窓辺に寄った。三谷の目が一つひとつ押さえる窓の外の家はドイツ的な秩序で整えられ、平然とした顔を装っている。だが、三谷には見えないが、その中では母親、老人、子供たちが戦場に征った夫や父や息子や兄弟を気遣いながら乏しくなった食料を分かち合い、迫りくる冬の寒さをどう乗り切るかを思案しているはずである。ドイツの運命よりも、それらの弱々しく身構えた人々の運命を考えると、三谷も暗澹たる気持ちになった。

そして、さきほどホテルの娘に見せた写真の中にある家族のことに思いが及ぶのだった。東京に残した妻子、それに八十を越えた母親のことを思った。日本とフランスとの手紙のやりとりは既に途絶えていた。フランスの報道でも日本軍は南の海や南西アジアの地で次々敗退していた。東京にも空襲が激しくなろうとしているようだった。

三谷は家族への思いを振り切り、城はどちらの方角だろうかと首を回した。

城らしい影はどこにもなかった。

三谷は自動車ですぐに近づいたときのことを思い出して

いた。

草むらの向こうに白い河面が広がっていた。ああ、これがドナウ河か、と思った。フランス人の運転手に訊いても分かるはずはない。そして、視線を正面に向けると、城の姿が見えた。それは孤影となって空に浮かんでいた。西方から街へと進入する道が坂となって下降するとき、突然前面の視界が開けた。多くの尖塔を抱いたゴシック式の巨城が岩盤の上に聳え立ち、まるで視界を圧するかのように迫ってきた。三谷はおとぎ話の絵の世界に入っていくような気持ちにとらわれた。甲冑をつけた中世の騎士たちが馬に跨がり、槍を手にしてそこから躍り出てくるようだった。

ペタンとラヴァルはあの城のどこかに入っているはずである。

三谷は窓から離れ、荷物の片づけを続けた。

フランスの国家元首である八十八歳の元帥ペタンが随員十人とともにジグマリンゲン城に入ったのは三谷らより先立つこと二日前の九月八日である。

この日午後、数台のトラックが地を揺るがすように街の中に入ってきた。そのあとを黒塗りのセダンが親衛隊員たちを乗せた数台の軍用車に前後を挟まれながら続いた。一団の車はカーブしながら城への坂道を上り、城壁

の傍らに止まった。車からは自動小銃を抱えた親衛隊員たちが飛び降り、油断なく周囲に銃を向けてセダンを囲んだ。車から夫人とともに降りたのは、白い口髭をたくわえた平服姿の元帥である。子供のない老夫婦そのままに、二人はお互いの老軀をいたわるようにしながら案内人に従い、正門である城門とは別の簡易な入り口にゆつくりと足を運んだ。そのあとを侍医ベルナル・メネトゥレルが従った。ドイツを訪問した外国の国家元首に与えられる歓迎式典などはなかった。元帥は、入り口の向こうに消え、エレベーターで自室としてあてがわれた城の上階へと昇っていった。

ラヴァルが夫人とともに街に到着したのはその翌日の九日午後である。ラヴァルには元閣僚らが同行した。城の中には十分部屋はあり、これらの部屋が要人たちに住居兼執務室として割りあてられた。

街にはこのあと、ヴィシー政権に関係したフランス人とその家族たち、さらには民兵団とその家族たちが陸統と入り、約七千人の街の人口は一挙に倍以上にも膨らんだ。

ツォラーホーフには三谷一行が到着した十日、遅れて一台のシトロエンが横づけにされた。車の屋根にはトラック、後部には自転車車が縛りつけられ、さらに幌を被せ